偉いという事

獣医学科４年　瀧口晴嵩

ある NHK の番組で知識人たちによる討論が行われていた。

日本人、アメリカ人など、ある一定期間以上先進国を経験してきた国民は「偉い」、「金持ち」というワードに良いイメージより悪いイメージを強く持つ。これは実は世界的には珍しいことであり、中国人などは（彼らはまた独特なのかもしれないが）将来について、「偉くなりたい」と口を揃えて言うらしい。たしかに物事には必ず両面性が有り、偉いことは絶対的に良いことだとも言えない。しかし、日本人はバブルを経験し資本主義の諸刃の剣に斬られ、偏屈になっている…。

優しさ、平和、偉い、お金…こんな言葉が並んでいたら日本人は美しい順にこう並べるだろう、平和→優しさ→偉い→お金と。こんな事を予想できるのだから自分も例外ではないのだが、これは「“敗者” たちの自己防衛反応であり、その下の世代に対する刷り込み」という性格を強く秘めているとの事だ。まず、この敗者という言葉自体使うのに抵抗があるのだが。

勝者 A と敗者 B がいたと仮定する。

B「人生の敗者とはなにか？給料が安いと言うことか？でも給料が悪くても好きな仕事をし、自分に素直に生きていればいいではないか？」

A「本当に自分の好きな仕事であれば技量を極めているはずだから、資本主義の日本ではそれが金に換算されるはずではないか？努力不足だ。」

B「俺の仕事はもともと給料が安いが職業に貴賤はない。それに俺は生まれつき頭が悪いから無理なのだ。」

A「頭が仮に悪くても職業は無数に存在する。何となく進学してきて、人生の展望をしっかり考えなかった自分が悪い。それにどんな業界でもトップを極めた人達は本当に幸せであり、それに見合った所得も受け取っている。」

B「どんな人間にも何かしら才能が存在すると言うが、金持ちには俺たちの気持ちが分からないのだ。」

どちらの意見が正しいとも思わない。しかしまとめると、本気で努力した（自称）と言う勝者、敗者に関して、

勝者；天職を選択した。好きなことだからスキルが上がった。お金が入った。

敗者；天職を選択した。好きなことだからスキルが上がった。

とでも言えようか？

まず両者の相違点について、好きなことだからスキルが上がったが、お金は入らないという敗者の主張にはこんな反論がある。必ず各領域にはトップの人間が存在し、彼らの報酬は莫大だ。同じ道を自分で選択した以上トップを目指さないのならその仕事に対する情熱がなさ過ぎる。

また、スキルとお金の関係について、スキルが身につけば自然とお金が入るのか？お金を手に入れるために（の）スキルを習得するのか？…前項の議論によれば自分の職業界でトップを

目指せば、スキル→お金が成り立つ。しかし必ずしもトップを目指さないのであればお金のためのスキルとなる。

最後に大前提。天職に就かなくてはいけないのか？職種は流れで決まっていくもので、家族が幸せであれば良い。多少生活に苦があってもそういう幸せが本質である。という意見も出てきそうだ。

反論はあるかもしれないが、どうも「トップを目指す必要性、蓋然性があるか？」が争点でありそうだと思う。人間は不平等だと思う。しかし、何かしら才能を持っていて、それは好きでたまらないことと多くの場合重なり合う。音楽が好き、ダンスをやりたい、サッカー選手になりたいといったよくある憧憬ではなく、本気で好きだと言うことである（本気で考えて音楽が好きなら音楽をやるべきだ)。そして才能があり、本当に好きならトップを目指せるはずだ。

トップという言葉の反対語にビリという言葉があるが、「オンリーワン」という言葉もある。当番組ではこの「オンリーワン」という言葉の強い懐疑性を指摘していた。たしかにオンリーワンであればトップであるはずだ…そんな気が私はした。ある恩師の一人は、「個性とは自分が人と違う事をする事ではない。いろんな事を人並みにやろうとしてどうしても出来ないこと、なぜかうまくいきすぎてあるいは熱中しすぎて“出る杭”のように浮いてしまうことである」とおっしゃっていた。つまりオンリーワンはトップの一部であると言うこと。…そして、トップであればお金が入る？

正直意見がまとまらないが、ただ何となくお金持ちは人種が違うのだなどと思うのは大間違いだと思う。少なくとも、お金という言葉から悪いイメージの方が強く感じられる日本人はかなり問題だと思う。よく考えやはりオンリーワンはオンリーワンなのだというのなら、偉いというクオリティーを否定できるが、マスコミやテレビのドラマに無意味に共鳴するのは間違いだと思う。類似例として、「平和が良い」という概念の普遍化が挙げられると思う。現代において平和が良いと教育されているのは結果としては正しいと思うが、盲目に刷り込みが行われているに過ぎないことが多い。これは過去の日本において富国強兵を遍く刷り込んでいた事と本質的に変わらないのかもしれない。良く考え、あるいは子供たちに良く考えさせ、結果「平和が一番」という結論に至るのであれば、それは初めて美論として意味を持つようになる。こういった例の多くは美化された言葉に見られる。しつこいようだが、平和が悪い、金が全てだと言っているのではない。たいして考えもせず、知らぬ間に既存の意見に賛同している状態が良くないと指摘しているのだ。

目標が低い自分を正当化していないか常に自分をチェックしなければ、と個人的には襟を正した討論であった。人生は一回限りであるから、限界まで心血を流そうと。